2025年7月16日・18日　水曜祈り会・金曜集会　　吉田真司

本日の学び　　テーマ:「探り求めるもの」　テキスト:民数記13章1-3節、17-29節

【理解の手がかりとして】

※主な参考書：日本基督教団出版局『新共同訳　旧約聖書注解Ⅰ』／塩野和夫『人生は荒野の旅路―民数記を学ぶ』

今課のテキスト（13 章）を含み、民数記全体の第二部「共同体の歩み」（11 章～20 章 13 節）の終わりまでを概観しておく。

約束の地を偵察するにあたり、偵察する者が召集された。この偵察は神の命令である（13:1）。カナンの地を与えると約束された神が責任を果たすべく偵察を命じられている。次いで、12 部族から一人ずつ部族の長である人々が選ばれた。その中にカレブ（13:6）、ホシェア（ヨシュア）（13:9、16）がいた。神から命じられた事柄をモーセは忠実に偵察者たちに指示している。※ヨシュア：モーセの死後、イスラエル人をカナンの地へと導き、各部族にこれを分配して嗣業を得させた人物。

12 人の偵察者は 40 日間カナンの地を偵察した後にモーセと全会衆に報告した。その報告は、その土地が「乳と蜜の流れる素晴らしい所」（13:27）であるという Good ニュース、しかし「その土地の住民は強く、町という町は城壁に囲まれ、大層大きく」（13:28）という Bad ニュースであった。

その報告を受け、カレブは「断然上って行くべきです。そこを占領しましょう。必ず勝てます」（13:30）と進言する。これは文脈上は神への信仰に立った進言と思われる。しかしその発言に対して他の偵察者たちは「いや。あの民に向かっていくのは不可能だ。彼らは我々よりも強い」（13:31）と反論し、加えて「悪い情報を流した」（13:32）。「我々が見た民は皆、巨人だった」（同）と。この反論には、神の約束がすっかり忘れられており、動揺から広められた噂は混乱の元となった。

悪い噂を聞いた民はすっかり動揺する。そして「エジプトへ帰ろう」（14:4）と互いに言い始めた。ヨシュアとカレブが民に対して信仰に立ち帰ることを勧めたが、民は聞く耳を持たず、ヨシュアとカレブを「石で打ち殺せ」（14:10）と言い出す始末であった。そんな民に対して神は激しく怒られた。それは民が「神を侮り」「しるしを無視し」「信じない」（14:11）からであった。その怒りは、「疫病で撃ち」「捨て（る）」（14:12）とまで言わしめる程であった。

しかし、ここでもモーセが「執り成し手」として働く。モーセはイスラエルの立場に立って彼らのために執り成す。それし神の大きな慈しみを根拠とした執り成しであった。「あなたの大きな慈しみのゆえに・・・この民の大きな罪を赦してください」（14:19）と。そしてこの執り成しがイスラエルの将来を救うが、不信の民に対する裁きも告げられる。それは 40 年にわたって荒野を旅しなければならないこと、カレブとヨシュア以外は約束の地を踏むことは出来ない（民は世代を越えてしかその地を踏むことが出来ない）ということであった。

■　献げ物に関する補則（15:1-31）安息日の違反（15:32-36）衣服の房（15:37-41）
15 章には、祭儀に関する種々雑多な細則が記されている。「わたしが与える土地にあなたがたが行って住むとき」（15:2）とあるように、約束の地に「入れる」という前提をもって、希望へと促す役割がこれにはあるものと思われる。そしその祭儀により主との関係、信仰を確立させる目的がある。

■　コラ、ダタン、アビラムの反逆（16:1-35）
16 章には、二組の反抗が記されている。一つは、アロン（モーセの兄）の権威に対するコラとレビ人らの反抗、もう一つは、モーセの権威に対するルベン（ヤコブの長子）に属するダタンとアビラ

ムの反抗である。これは、神から授けられた権威に従って職務を果たそうとするのでなく、さらに上位の権威を求めた誘惑による反抗である。そして民もこれに迎合した。その民の愚かさは、神への信仰から離れ、人の思いや言葉に関心を向けたところにあった。

- 香炉（17:1-5）アロン、民を救う（17:6-15）アロンの杖（17:16-26）
  17 章には、祭司の職務に大切な「香炉」に関する指示、そしてアロンによる罪の贖いの儀式により、民が救われたことが強調されている。さらには「アロンの杖」の奇跡（芽を吹き、つぼみを付け、花を咲かせ、アーモンドの実を結ぶ）により、祭司族の長たるアロンの権威が示され、それによって民の不平が止むことが告げられている。

- 祭司とレビ人に関する規定（17:26-18:32）
  18 章には、アロンに関する二つの規定とレビ人に関する規定が記されている。「主はアロンに言われた。・・・『あなたとあなたの子らは、共に祭司職に関する罪責を負わねばならない。・・・あなたたちが聖所の務めと祭壇の務めを果たす。そうすれば、怒りが再びイスラエルの人々に臨むことはないであろう。』」（17:1-5）とあるように、信仰共同体における祭司の職務の重要さ、それはすなわち「罪の贖い」無しに生き得ない民の現実があるのである。

- 清めの水（19:1-22）メリバの水（20:1-13）
  19 章には死体に触れることによって生じる「汚れ」を取り除く「清めの水」の製法と使い方、20 章には、有名な「メリバの水」（民の不満を受けて岩から水を湧き出させた）の奇跡話が記されている。

信仰共同体にとって、無くてはならないもの、それは一にも二にも神への信頼である。それを失うことを「不信仰」と言う。荒野の経験は度々、その現実の困難さ故にその信頼を揺るがす。そして不信という罪を繰り返す、それが共同体の現実であった。しかしだからこそ「贖い」の恵みが必要であり、そのための「執り成し」、そして折々の「しるし」（神の臨在の再確認）によって引き戻されていく。このイスラエルの民の歴史に、私たち「教会」（信仰共同体）の歩み（絶やさぬ礼拝の尊さ）を重ね合わせて深く考えさせられる。

（聖書教育より）

「もしもナザレのイエスがモーセの立場にいたら、カナンの地を探し求める尺度はどのようなものになるのでしょうか。悩み苦しむ者たちと共に生きるためにガリラヤ中を歩き回ったイエスが、私たちの聖書解釈の尺度です。」（聖書の学び～探求する）。